
ちっぽけな存在と世界の見せる物語

ナインキューブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちっぽけな存在と世界の見せる物語

【Nコード】

N6879Y

【作者名】

ナインキューブ

【あらすじ】

気付いたらここにいた。そうとしか言いようが無い。今、自分は暖かい暗闇でそんなことを思考することぐらいしかすることがない。月と太陽がどれだけ巡ったのかもわからない。やさしい子守り唄のような音色に包まれてまどろみ眠るだけの存在にすぎないだけど、この揺り籠からもしも出れたらなにをしようか？死んだはずの自分が帰ってきたら家族は驚くだろうか、喜んでくれるだろうか？そういえば自分は本当に死んだのだろうか？ああ、そんなことを考えているうちにまた眠くなってきた…

胎児の追憶（前書き）

初めてのオリジナルなので温かい目をお願いしますー

胎児の追憶

ゆらゆらふわふわぽかぽか

まぶたの開かない俺が感じられることはこれだけだ。ただこの感覚だけが俺という存在が思考していることを確かにしてくれる

そんなことを思い続けてどれほどの時間が過ぎたのかはわからない。最初の数十分はできたがすぐに猛烈な眠気に襲われてそのまま意識が落ちてしまったために、それから数えていない。ドミノを中途半端なところで崩してモチベーションが落ちてしまったとでも考えればいい

そんなふうには時間の概念も曖昧になってしまっただけに俺は闇の中で漂っているが、不思議と退屈に押しつぶされるような感覚に襲われたり、嫌気がさすようなことも無い。むしろずっとこのままでもいい、そんな気分になってくるのだから

そういえばどうして俺はここにいるのだろうか？

この暖かさのなか、久しぶりの感情に思いを馳せるとしよう

俺には死んだ時の記憶がある。と言ってもその瞬間ではなく死ぬんだな、と思ったときまでしか覚えてないのは幸いなのか否かは言うまでもない

事故で死んだのではなく俺が死んだ理由は病気だ

医者の方先生曰く、原因も治療法も不明というものらしい。その後も何か言っていたような気がするが、治らないのなら興味は無かった

し、時間が限られているのなら自分のしたいことがしたかった
それからの一日一日はとても輝いていた。一分一秒が何よりも楽し
かった。ずっとこのままでもいいと思ってしまうほどに

そして俺の意識は妹と「また明日」その言葉を交わしたのを最期に
終わっている

ああ、そんな事を考えているうちに眠くなってきた
本当に今の俺はここにいるのだろうか

ちっぽけなスタート(前書き)

THE 説明会

ちっぽけなスタート

あれからまたしばらく経った気がする

最近はずつすらと光のようなものが瞼越しに差し込むようになってきた

なんとなくだが、目覚めが近いのかもしれない

そんなことがわかったところで今の俺にはどうしようもないので寝るとしよう

フツ、と浮遊感を感じて起きた俺は自分が落ちていることに気が付いた。目を開けようとしたが眩しさに目が慣れず蒼白い光と何かのぼんやりとした輪郭しか認識できない。ほぼ一年近く目を開けていないのだから当然だ。それでも俺は状況を確認しようと必死に目をしばたかせる。その間も何かに縋ろうと手足をバタつかせる。しかし、むなしく空を掻くだけでなにも触れることは無かった

そつこつしているうちに目が慣れてきたのか、景色が鮮明になる

綺麗だ

俺は空中でもがくのもやめて魅入っていた
俺の視界に広がるのは、幹から葉にいたるまで水晶でできた大樹と
その葉が万華鏡のように幻想的な光であたりを包んでいる光景だっ
た。それは溜息を吐くような美しさでそこに在った

だけど俺の心をもつと震わせたのはその幻想の先、そこだけぼつか
りと水晶でできたドームの天蓋が砕かれたようになっていいる部分か
ら見える二つの月とそれを擁く漆黒の星空だった。それに向かって
手を伸ばす俺の手はどうしようもなくちっぽけで、だけど
その先を思う前に

ドボン！！

今度は揺らめく光と白い泡に俺の視界が切り替わる。と同時に先ほ
どまでの浮遊感の代わりに呼吸が苦しくなってきた。俺はどうやら
水に落ちたらしい。硬い岩の上でなかったのは幸いだが、もう少し
穏便なモーニングコールが欲しかった

俺は水面を目指して手足を動かす。そこまで深いわけではなかったのですぐに顔を出すことができた
チャポ、という音とともに顔を出した俺は手近な岸へと拙いながらも泳いでいく

やっとこさ岸にたどり着いて一息ついた俺はゲホゲホ、と咳き込もながら久しぶりに口を動かし言葉を発した

「一体全体何がどうなって…ってあれ？」

違和感を感じる。いや、長い間喋ってないとかそんなことじゃ片付けられないくらいい。再び声をだす

「桜咲く桜の山の桜花咲く桜あり散る桜あり 桜咲く桜の山の桜花咲く桜あり散る桜あり 桜咲く桜の山の桜花咲く桜あり散る桜あり 桜咲く桜の山の桜花咲く桜あり散る桜あり」
焦って思わず早口言葉で確認してしまったが間違いない

声が子供特有の高くて舌足らずな感じになっていた

あまりの事態にしばらく俺は呆然としていたが、のろのろと岸辺の水を覗き込んだ。

そこ映ったのはとても綺麗な顔の子供がいた。白磁のような肌に金色の瞳。あきらかに尋常の人間ではない。思わず自分の顔をペタペタと触るが、そしてまた気付く。自分の手が小さく華奢なものへと変わっている

間違いない、この姿は俺であって“俺”でない

「…ま、いいか」

あつさりしすぎている感もあるが、正直なところ死んだせいで精神が落ち着いているというのもある

とりあえずは自分と周りの状況を確認しよう

改めて自分の姿を見る。かなり注意して見るとうつすらとかつての俺の面影が見てとれる。が、かなり注意深く見なければ輪からなし、間違ってもかつての俺の姿はこんな並外れたレベルで綺麗ではなかった

だが顔はいい、綺麗といえば疑問は残るがそれで強引だが解決する問題はこの髪だ。銀を基調としているのだが、光のあたる角度によって淡く色彩が変わっているのだ。どんな進化の系譜を辿ればこんな特徴が顕れるというのか
そして体だがどうやらパツと見た感じでは大体七歳くらいであろう背丈で全裸だ。全裸である

「当面の目標は服かあ…」

摩訶不思議な体験を今まさに現在進行形で体験しているというのに何とも情けない話だが、大事である。大事なのである

今度はあたりを見回す

まず目に付いたのは全てが水晶でできたかのような大樹だ。少し視線を上に向けると洞がありどうやら俺はあそこから落ちたらしい。落下時間が長く感じたのはこの幼児サイズの体だからだろうか。この樹はマングローブのように湖に太い根を下ろしているのだが、養分は一体どこから取り入れているのだろうか？

湖の周りの地面にはそこから突き出した大小さまざまな結晶らしきものがあたりを色とりどりに飾っていて俺の興味を引いた

それに恐る恐る近づき俺は手を伸ばす。色合いとしては金色を基調として淡い燐光を放っているものだ
手のひらがその表面に触れる。思っていたような水晶特有の冷たさはなく、感触として最も近いのは漆塗りとでも言おうか
同時にこの水晶からボンヤリとだが、何かがちらに流れ込んでくるような感覚に気付いた
慌てて手を離して距離をとる。なにも起きない。

「なんだろ？」

手のひらをまじまじと見つめるがわからない。仕方無い、もう一度試してみようか

二度目なのでそこまでためらいは生まれなかった。今度も同じ感覚だ。ただ落ち着いたからなのかさつきと違って、この感覚は害のあるものと言うより心地よい感覚に近いことがわかった。
十秒ほどそのまま結晶に触れていただろうか。唐突に変化が起こった。金色の燐光が薄くなったかと思うと結晶がどんどん灰色になる。ついにはただの石の角柱のように変わってしまった。
コンコンと叩くがどうやら石のせきになってしまったようだ。
他にも色は違うが同じものがたくさんあるからもう少し調べてみよう。

あれからしばらく俺は結晶に触れて、それを石のようなモノにするのを繰り返していた。

かなりの回数をこなしたため景色に灰色が多くなってしまったが、それでもまだ結晶は腐るほどある。だが、わかったこともある。

この結晶を石にするのを繰り返していたのだが、始めてから少しした時に変な感覚に襲われたのだ。

自分のなかの歯車がカチリ、と噛み合ったような感覚とでも言うのだろうか。そのあと少しの間俺は気絶していた。

そして起きた俺の頭に浮かんできたのは【力】と言う概念だ。自分の力についてのものについて頭に注ぎ込まれていた。原因は結晶に触れ続けたことだろうが、理由はわからない。メビウスの帯の表裏を求めるようなものだ。

とにかく俺は自分の力についてある程度の知識を得ることとなった

一つが異能の力だ。とりあえずこの力のことは暫定的に魔法と呼ぶこととする。なぜ算定的なのかという点、もはや語るまでも無いがここは俺が元々生きていた世界とは別の世界 異世界だ。ならば他の知的生物がいるかもしれない。だから暫定的と言う意味だ

その【力】は大まかに分けて三種類。【呪晶】 【植物淵】 【星鍊】だ。この三つの単語は俺が起きて真っ先に浮かんだ言葉で、どうやらそれぞれが力の名称のようだ

まず【星鍊】これは金属類への支配系統の能力らしい。試しに地面に手を向けて念じてみたら液化した鉄が出てきてかなり驚いた。あの程度の操作も可能でスライムのようにも、硬質な刃のようにも形成することができた。現在は巨大なインゴットにして放置している。だって邪魔なもの。時間ができたら鍛冶のまねでもしてみようかな？

次が【植物淵】これは現状で最も重要度の高い能力だ。名前から察せるように植物への干渉がメインで、他にも品種改良（という名の魔改造）も可能だ。例えば実が爆弾のように一定の条件化で炸裂する植物や食獣植物の創造などだ。ただこの能力を使うのはほどほどにしておく必要がある。ここは地球ではなく未知の異世界だ。なにかの弾みで俺でもコントロールできないような存在が生まれないと限らない。否、確実に生まれるだろう。生まれてしまったならそれを殲滅する必要性が出てくる。それをするのは至極面倒だからね。これで服の原材料にできそうな植物の生成を最優先目標としよう。

最後の【呪晶】これは三つの中でよくわからない能力だ。これはあとに突き立っている結晶に触れることでその力を自分のものに変換して取り込むというものだ。集めれば集めただけ上昇し続けるよ。うなのだが、その先がわからない。取り込んだ結晶は任意で顕現させ、形もある程度の変形をさせることができる、ただ【星鍊】のびつくり金属操作ほどのレベルは無理。これくらいしか使い方がわからない。

さてここで可能なことはわかるのに使い方がわからないのはおかしいと思うだろう。これには理由がある。

先に言った【力】についてだが、それぞれ与えられた知識にばらつきがある。【星鍊】にはほぼ全ての知識があり、現状では一番使いこなせていると言えるだろう。しかし残り二つはかなりひどいことになっている。【植物淵】は使用方法の概要はわかるが細かい点がわからない。【呪晶】は使用方法がわかっててもその用途がイマイチ判明しない

【星鍊】がチュートリアルでの説明なら、他の二つは説明書だけを渡されたようなものだ。ある程度はわかるが、それはある程度だけであって腕を上げるには実地で熟達していくしかない

さて、【力】についてのおさらいはこれくらいにして次は俺のいる現在位置についてだ

ここは水晶大樹の湖を中心として構成されているようだ。そして湖一帯のかなり広く開けた場所には数多の結晶が突き出している。その外縁には白っぽい水晶の壁がぐるりと囲んでいてここから外へ繋がる道は無かった。いくら特殊でも小学生レベルの身体能力で壁を登るのは不可能だし、外の危険性がわからない今、急いではあるさりと死にかねない

あとここはすり鉢の上を中央の天井が無いドームで覆った地形をしていて、その穴から空が見えている。湖にも潜ってみたが、そこが全く見え息が苦しくなってきたために諦めた。底なしの蒼さが怖かった

今のところざっとするとこんな感じであろうか。あくまで大雑把な探索だったので細かい部分はこれから進めていこう

しばらくは結晶光集めに奔走するだろうが。使い方はよくわからないが、とりあえず手札が多いに越したことは無いのだから

「目指せ服！」

なんとも情けない気もするが、こうして俺の異世界での物語が幕を開けたのであった

ちっぽけなスタート(後書き)

いつ知的生物が出るかは不明

戦場発見

あの始まりから数日経った今、俺はとりあえずの衣類を手に入れることができた

【星鍊】を用いて液体状の金属を湧かせ、それを細く形成、編みこんで丈が大きめのロングコートを作った。ただ元が金属なだけあってあまり着心地がよくない。綿とかの服が恋しい。目的である服には遠いなあ

袖余りのコートだが、前をしっかりと留めていれば全裸よりはマシだろう。ボタンも多目につけたのだから。しかし正直なところ人目も全く無いし、気にしないですむから下着とかは着心地の悪い金属では作りたくない。そのために丈が足首まであるものを作って全身を隠しているのだ

食料だがこれは問題は無い。どうやら俺という種にとって食事はそこまで重要ではないようだ。湖の水を飲むだけで何の支障もなかった。だが、味覚自体は存在していて俺にとって食事は娯楽に近いのかも知れない。

これは目的に食道楽も付け加えようかね。

そうそう、俺は驚くべき発見をしたのだ。湖で沐浴兼、素潜りをしていたら、なんと外に通じていそうな裂け目を見つけた。

「外に出て探索してみようかな」
あくまでも探索だ。出立ではないから帰って来るつもりだ。

「善は急げとも言っし、それじゃあ行こう」
準備するにしても持っていくものなんてこのコートくらいだし。
しかし最近独り言が多くなった気がするよ…

深い蒼を湛える水面向かって俺は飛び込む。その時に一瞬だけ水面に映し出された貌が俺の存在が変わったことを改めて認識させる。
こればかりは時間にゆだねるしかないだろう

（なんだかんだで未練たらしいなあ、俺も）

俺を包む蒼はソレを肯定も否定もせず、ただ差し込んだ光をカーテンのように揺らめかせていた

潜る俺の視界にはただ底無し蒼が広がるだけで、生命の息吹を感じさせるものは何一つとして映らない
しかしそこに不気味さはなく、いかなる存在も許されない聖域のような静謐さがあった

（我ながら随分長く息が続くもんだ）

もう既に十分分近くは潜水しているがまだまだ俺には余裕があった。この体はつくづく人間離れしている。いや、食べ物が必要の段階でおかしかったけどさ

かなり深くまで来たせいであたりは暗く、手元もおぼつかなくなってきた。しかし、この程度は俺にとって問題ないのだ。

手元に拳大の結晶を出す。銀色に光るそれは、深海に堕ちた月光のようにも見える。これは俺が【呪晶】で顕現させた結晶の燐光を利用した即席の照明だ。ポケットに結晶を突っ込むと明るさは落ちるが、仕方が無い。手が塞がっているには泳ぎにくいし、ポケットから洩れ出る光でも視界は確保できるからNO問題

そうこうしているうちに例の裂け目にたどり着く。

一枚岩をくりぬいたようなこの中でここだけ裂け目があるのだ、気付かないほうがおかしい

ゆっくりと近づくと俺は注意しつつ、その裂け目に入る。この世界、右も左もわからない俺にとって注意して進む必要がある。俺という存在がファンタジーになった今、どんな不可思議な生物がいてもおかしくは無い。

魔物とか

一先ずは入り口付近の安全を確認した俺は遅々とした速度で進む。帰り道を忘れないように結晶を一定間隔で壁（天井？）に生やしなから。関係は無いが小学校で体験した田植えを思い出した。お米食べたい

かなりこの行程を続けていたが、向こうに光が見えてきた。どうやら終わりが近いらしい

ちやぷん、水面から俺が顔を出した音があたりに響く。そのまま岸へと泳ぎ着いた俺は陸に上がる。

コートは原材料が金属だけあって水滴が残る程度ですぐに水は流れ落ちた。

濡れた髪が首に纏わりつくことをうっとおしいと感じながら歩き始める。

目下に蟹がいる。より詳しくするなら、“馬鹿でかく”“戦っている”蟹がいる。

戦っている相手は銀色の鎧を纏った五人組で、騎士であろうか統率の取れた動きをしている。ただよく見ると騎士たちの甲冑にはそれぞれ微妙な違いが見て取れる。五人のうち盾を持っているのが三名、他の二人は一人は杖、もう一人は剣だけを手に持っている。杖を持っている者は後方にいることから魔法かそれに類する遠距離の攻撃手段を持っているのではないかと思う。だって完全にファンタジーの魔術師そのものの杖だもの。

対する蟹の大きさは高さ四メートルくらいだろうか、蟹特有の感情の伺えない無機質な目が五人を睥睨している。また甲殻も刺々しく変化しており、かなり攻撃的な外見をしている。体の色は灰色なのだが、はさみだけが血で色づけされたように赤黒い。まるで数多の罪人の血を吸ったギロチンのようだ。

戦況はどうやら騎士たちのほうが劣勢のようだ。蟹の足は一本が断たれそこから青い体液が流れ出しているが、活動に支障はなさそうだ。しかし騎士たちは満身創痍のように見える。ここからでは顔を見ることはできないが、あたりに飛び散っている血をみればわかる量からしてあの五人の誰かの傷とは思えない。恐らく十数人でこの蟹と戦っていたが、何人が重傷者がでて、さらにそれを安全圏まで運ぶのに人数を割いたといったところか。かなりの人数で挑んで足

一本、わずか五人では足止めが精一杯だろう。
しばらく様子を見ていよう。そう思った俺は身を伏せる

俺のいる位置はちょうど両者を上から見下ろすように存在する崖の上だ。穴から出たら洞窟の天井がすぐ近くにあるここに出たのだ。さて、一体どちらに手を貸すべきか。というか言葉は通じるのだろうか？

私たち【ドラクロワ騎士団】にとって今回の任務は簡単なものはずだった。病に侵された姫様のために薬草を採る、ただそれだけのはずだった

他の任で外れた団長と副団長を欠いているとはいえ薬草の採集のために精鋭十二名でここ、【再誕の空洞】に来たのだ。ここは出てくる魔物も弱く、洞窟自体も入り組んでいないためにギルドの初心者がかかることも多い。そんなところであり、本来なら私一人でも問題は無かった。しかし、事が事だけにこんな人数で行動することになった。ここにある薬草は採集することだけならば簡単だが、摘むとすぐに枯れてしまうという厄介な性質があり保存が利かず、枯らさないためには常に魔力を注ぎ続けなければならぬ。その維持条件の厳しさがこの薬草が市場に出回りにくい理由だ。

しかし私たちの騎士団には魔術師がおり、四人でローテーションを組むことで城まで持ち帰るといふ手段を取った。

行き道のりは特に問題は無かった。出てくる魔物も下位のものばかりで襲い掛かってきたとしても即座に倒せた。拍子抜けするほど薬草の群生地に辿り着いた私たちは、打ち合わせ通りに魔術師たちに採取した薬草に魔力を注がせた。あとは城へと戻る、ただそれだけのはずだった

そう。はずだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6879y/>

ちっぽけな存在と世界の見せる物語

2011年12月3日20時49分発行